

日本大学文理学部

史学科同窓会

會報

第六・七合併号

(通号八三・八四号)

令和四年三月三十一日発行

〒一五六―八五五〇

東京都世田谷区桜上水三二―二五―四〇

日本大学文理学部史学研究室内

℡〇三―五三二七―九二一八

史学科左見右見

学科主任 松重充浩

二〇二〇・二一年度を振り返り、史学科にとって一番大きな出来事は、なんとといっても、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)以下「新型コロナウイルス」と略)の猛威でした。

二〇二〇年四月以降、文理学部では、学生のキャンパス入構を制限し、ほぼ全ての授業をオンライン形式としました。これらにより、従前の所謂「学園生活」は激変します。キャンパスは学生が集う場所としての機能を失い、学生間あるいは学生と教員の交流はインターネット空間に事実上限定され、学生間が互いに歓談し、教員と学生が時に激しく議論するといった光景はキャンパスから消えました。

他方、教員側は、多種多様なオンラインソフト・機材の利用方法や、一度も対面したことがない学生への効果的指導・適正評価方法などの習得に忙殺され続け、移動制限の強化の中で各種の実地調査などの研

究活動も大きく制限されることとなりました。

以上の状況は、二〇二一年度には一部緩和されるも、基本的には現在まで継続しています。もちろん、大学や教員側も手をこまねいているだけではなく、経済困窮学生の救済処置や各種相談の充実化などに務めています。状況の劇的な改善には至っておらず、誤解をおそれずに言えば、試行錯誤を繰り返す状況が続いています。その意味で、史学科教職員は、所謂「with コロナ」に向けて、学生達や同窓会の皆様の声を真摯に受けとめつつ、対面を必ずしも介さない、教育・研究方法や学生交流機会の創出、同窓意識の涵養など、豊かな「学園生活」を取り戻すための処方箋を創発していく必要に現在直面していると言えます。

もう一つ忘れてはならないのは、二〇二一年九月以降明らかになった、前理事と前理事長の逮捕という日本大学として未曾有の不祥事の発生です。

もちろん、史学科がこの不祥事に直接関与しているわけではありません。しかし、ここで留意すべきは、本件に対する日本大学教職員有志や日本大学教職員組合のコメントに示されているように、この不祥事発生の要因が単なる個人的な悪辣さだけではなく、長い時間を通じて構築された日本大学のガバナンスシステムにもあった点です。このことは、史学科の卒業生を含む日本大学教職員と学生・院生の大半が、その長い時間の中で少なくとも垣間見ることがあったであろう制度的改悪などに対して黙認あるいは無関心だったことを意味し、同時に、

史学科の教育・研究が「おかしなことに、おかしいと言う」勇氣と実践の喚起に結果として結びついていなかったことも意味しています。現在の史学科教職員スタッフは、学生・院生が「おかしなことを、おかしいと言う」力を持ったための教育・研究を改めて追究・実践していく必要に直面していると言えます。そして、同窓会の皆様には、もし「おかしなことを、おかしいと言う」勇氣を持つ学生・院生に出会うことがあれば、その勇氣に「それでこそ、史学科の学生・院生だ」と励ましの言葉をかけて頂ければ幸甚に存じます。宜しくお願い申し上げます。

新任紹介

〈文理学部史学科にやって来て〉

伊藤雅之（史学科准教授 古代ローマ史）

はじめまして。平成三二年四月に文理学部史学科に着任した伊藤雅之と申します。今回は、私自身の紹介や経歴、近況などについて書いてもらいたいというご依頼をいただきましたので、着任して三年目とはなっていますが、遅まきながら皆様にこの場をお借りしてご挨拶をさせていただきますと思います。

まず授業についてですが、坂口明先生の後任として西洋前近代史のゼミナールなどを担当しています。講義の方では、私自身が古代ギリシア・ローマ、特にヘレニズム期および共和政中期のそれを専門とし

ていることから（例えば、文理学部着任後の令和元年に山川出版社より『第一次マケドニア戦争とローマ・ヘレニズム諸国の外交』を、そして令和三年には『The Journal of Hellenic Studies』という論文雑誌より“A Reconsideration of the Chronology of a Decree of Abderra (Syll.³ 656) and the Introduction of the Concept of Roman Patronage to the Greeks in the Second Century BC”という論稿を出させていたいです）、主に西洋古代史を教えています。またいわゆる史学史(Historiography)よりの研究も最近を進めていますので、その中で得た知見なども講義でよく活用しています。

日本大学に来る前のこととしましては、まず私は東京大学で西洋史を学び、そこで古代ギリシア史を担当されていた桜井万里子先生の下で卒業論文を書きました。そしてそのまま平成一八年（二〇〇六年）に同大学院に進み、退官された桜井先生に代わって着任された橋場弘先生の下で研究を続けました。平成二〇年には同博士課程に進学し、さらに二三年にイギリスのエディンバラ大学に留学しました。この頃には前述の学問領域を専門にしようという気持ちで固まっていたので、留学先は、その方面の専門家がいるところから選びました。エディンバラ大学には、現在でもヘレニズム史研究の重要な牽引者である、アンドリュー・アースキン(Andrew Erskine)先生という方がいらっしゃるし、私もこの先生の下で研鑽を積み、平成二八年にPh.D.を取得しました（ちなみに、留学を始めてから程なく、日本での政權交代などにより大幅な円安となり、円換算だと授業料を含め、多くの料

金が従来の1.5倍に跳ね上がりました。

帰国後は、日本学術振興会の特別研究員（PD）として、当時は鎌倉女子大学におられた長谷川岳男先生（現在は東洋大学に在籍）のご指導の下で研究を続けました。また学生だった頃の先輩の方などよりの紹介で、非常勤講師として働き始めたのもこの時期からです。ここでは、まず単純に人に何かを教えることの難しさを体感しましたが、加えて、歴史というその知識がどう役に立つのかが明確ではない、しかし役立てる方法を考える余地は無限と云ってよい学問を、どう教えれば学生にとって有益かということを考える重要性に気づかされました。前述の史学史への関心も、こうした模索の中で生まれました。

最後に、PDの任期三年を終えて文理学部に来てからですが、専任教員として働くことは初めてでしたので、何かと知らないことも多く、一人前の教員・研究者となる道の険しさと、やりがいを感じる日々を過ごしています。とはいえ、史料や研究書などを読みつつ自身の研究を進めるための時間の捻出は以前よりも相当に難しくなっており、この点をどうするかも大きな課題と考えています。

以上、少々長い文章となりましたが、これからも皆様のご期待などに沿えますよう努力を続けたいと思っておりますので、何とぞ、ご指導・ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

〈日本大学史学科での二十年間〉

小川雄（史学科准教授 日本近世史）

私は、学部は東海大学であり、大学院から日本大学に入った「外様」ですが、巡り合わせに恵まれ、現在は日本史近世ゼミをお預かりしております。

前任にして恩師の上保國良先生は、ゼミ生・院生に自由にテーマを設定させつつ、核心をおさえたアドバイスによって、研究を促進させていくスタイルをとっており、私も史料の読み解き方、論理の組み立て方について、穏やかながらも厳しいご指導を賜りました。また、中世史の鈴木國弘先生の大学院ゼミでは、活発な議論に参加するとともに、鈴木先生の縦横無尽・融通無碍な論理展開に圧倒されながら、「かくありたし」という思いを募らせました。

博士課程が満期となった後は、逗子市教育委員会の非常勤事務嘱託に採用され、古文書の翻刻作業（文字起こし）に従事しました。また、大学院在籍中にお世話になった村井益男先生のお誘いで、並行して日本大学大学史編纂課に臨時職員として勤務し、ここでも史料の翻刻作業などに携わりました。掛け持ちの勤務は、慌ただしくはありませんが、大学で学んだ史料読解のスキルを実践し、より研磨することができ、大きな財産となりました。

また、勤務の傍ら、自分自身の研究も続け、日本大学史学会をはじめとする研究会で報告し、論文を発表していくうちに、愛知県西尾市

や東京都清瀬市の自治体史編纂に参加する機会も得ました。逗子市や大学史編纂課との契約が満期となった後も、日本大学通信教育部校友会の事務の手伝いをしていましたから、日本大学から継続的に仕事を回していただき、恵まれた環境にあったと思います。

やがて日本大学文学部・通信教育部で講義を担当することになり、二〇一八年度から上保先生の後任として、日本史近世史ゼミをお預かりしています。上保先生と同じように、学生に希望通りのテーマを設定してもらい、その手助けにつとめ、銘々が「自主創造」を実践し、将来に向けて、何かしら得るものがあるように心がけています。

なお、本来の研究課題は「一六・一七世紀の徳川権力と海上軍事」ですが、現在はさらなる総合化を目指しています。徳川権力とは、中世と近世をつなぐ存在であり、その論点は海上軍事（水軍の編成と運用）にとどまりません。

ところが、現在の徳川権力論は、本来の利点をかならずしも活かしていないように感じられます。中世史の立場から論じたものは、一七世紀以降の展望を十分に提示しておらず、近世史の立場から論じたものは、一六世紀段階の研究を十分に消化・吸収できていないのです。

そこで、徳川権力論について、自分なりに中世史・近世史の研究状況を整合し、「中近世移行期」という概念により実態を備えさせることが課題であると認識しています。それは、「近世とは何か」というより大きな問いへの答えを見出す手段にもなるはずだと考えております。

〈桜と倉庫に導かれて〉

武井紀子（史学科准教授 日本古代史）

本年度から文学部史学科に着任しました。専攻は日本古代史です。どうぞ宜しくお願いいたします。

早いもので、着任してから一年が経ちます。昨年の三月の終わりに文学部の校舎を訪れた時、桜並木が綺麗だったのを思い出します。昨年度までは青森県の弘前大学に在職していましたが、弘前も東北屈指の桜の名所です。さらに遡って、弘前に赴任する前には、学術振興会の特別研究員として国立歴史民俗博物館に在籍していました。博物館の建つ佐倉城址もお花見スポットの一つです。どうやら私は、桜にゆかりのある場所と縁が深いようです。

私は古代国家の支配構造について関心があり、税制や財政制度などについて研究しています。研究の出発点は、卒論で取り組んだ倉庫制度です。研究室にあがる前の大学二年生の時、奈良に行く機会があり正倉院を訪れました。教科書などで写真は見ていましたが、実物の迫力に感動しました。私が古代史を専攻したのも、それがきっかけだったように思います。

大学院修士課程の時に北宋天聖令の残本が全文公表され、唐倉庫令の全容が判明しました。その途端、研究状況が一変しました。なぜなら日本律令の倉庫令は散逸し、全て失われていたからです。当時は急に現れた新しい史料に戸惑い、どうしたら良いか分からずに、四苦八

苦しながら修論を書きあげたのを覚えています。

その後、博士課程に進学してから佐倉の歴博に通い始め、持ち込まれる出土文字資料の整理・調査を手伝いながら、その扱い方を学びました。歴博で同時期に立ち上げられた古代文字文化の共同研究にも参加させてもらい、日本だけでなく韓国・中国の文字資料を実見する機会にも恵まれました。その中には、倉庫業務に関わる資料がかなりの数ありました。倉庫が日本だけでなく東アジアの古代史のありとあらゆる面に関わるものだと実感したのは、この頃になってからです。以来、古代倉庫研究は私の原点であり、根幹であり、終わることのない研究課題であり続けています。私の研究スピードが亀の如くに遅いのが原因ですが、いまだにそこから抜け出せずにいます。

古代の倉庫のことであれば何でもやる。今にして思えば、研究の上で私が主体的に決めたのはそれだけです。あとは流れに身を任せ、目の前のことを追っているにすぎません。もはや、私が倉庫を研究しているのか、倉庫が私に研究させているのか分からないくらいです。

そういえば、倉庫遺構が検出されている地方官衙遺跡は公園になっている所が多く、地域のお花見の場所となっていることがよくあります。東京では、北区の飛鳥山公園一帯（武蔵国豊島郡家跡）がまさにそれです。

桜と倉庫とー。好きなものに導かれて、今ここに至りました。辿り着いた先の、この史学科での新たなご縁を大切にしながら、研究・教育に従事していきたいと思っています。

〈着任の「挨拶」〉

福島恵（史学科准教授 中国・北朝隋唐史、東西交涉事）

本年度四月より東アジア前近代の専任教員として着任いたしました福島恵と申します。歴史ある日本大学史学科の一員となれたことを大変うれしく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

私は日々、ユーラシアの東西交渉を担ったソグド人・バクトリア人について、特に中国の北朝隋唐時代に作成された墓誌という石刻史料を使って研究しております。しかし、まさか私がこのような研究をするということも、大学で教鞭を執るようになることも、学部生時代は全く想像しておりませんでした。

私がこの道に進むきっかけとなったのは、学部三年次に行った一年間の中国留学です。私が留学した約二〇年前の中国は経済発展が本格化しはじめた時期で、日本でも中国に関する期待や関心が高まっていました。私は、父の友人の勧めを受けて、今後専攻したい歴史学の勉強のためにも、就職活動にもきつとプラスになるだろうという軽い気持ちで中国北京に留学することにしました。

しかし、その留学生活は一筋縄ではいきませんでした。初めての海外、それも長期滞在で、中国に関しても勉強不足だったので、私は日本との違いに事あるごとに戸惑ったり、衝撃を受けたりの連続でした。現地の中国語は速いし声も大きいこと、いくら戸締りしても黄砂が室内に入ってくること、市内でラバが荷車をひいて必死に労働している

こと、お店で店員がお釣りを投げて返すこと、つい先日まであった街並みがある日忽然と姿を消すこと、そして、どこで食べても肉まんが信じられないほど美味しいこと、大学生が猛烈に勉強していること、中国人は仲良くなるとことん優しいことなど、きりがありません。また、これら日々の生活も刺激的でしたが、それ以外にも、長期休暇中には大同・西安・洛陽・昆明・上海など中国各地を旅行し、広大な中国には様々な自然環境があつて、多種多様な民族がいることを体感できました。さらに、私が留学した年は、中華人民共和国建国五〇周年（一〇月）やマカオの返還（十二月）という国家的な節目でもありましたが、NATOによるユーゴスラビア中国大使館の爆撃（五月）が起き、それに対する大学生による大規模な抗議デモを実際に目にもして、いわゆる「民族意識の高揚」というものを身をもって経験することもできました。この留学中の様々な体験の中で、「中国とは何か?」「中華民族とは何者か?」という単純で難しい疑問を抱くようになり、これが今も私の研究で根本的なテーマとなっています。

今にして思えば、世間知らずの無謀者だったので、私にとつては想定外の出来事が次々に起きて、その度にシヨックを受けた留学生活となったのですが、だからこそ、人生を一変させるような研究テーマに出会えたようにも思います。留学は若い時だからこそできた無謀な挑戦でしたが、今後、日本大学史学科でも様々な出会いを大切に、教育・研究活動に挑戦していきたいと思っています。

現役学生の声

〈現役学生の声〉

日本史ゼミナール（古川隆久先生・近現代史）

史学科四年 千葉彩加

——今回は日本近現代史の古川隆久先生のゼミナール紹介です。まずは千葉さんが研究しているテーマについてお聞かせください。

（千葉）私は「大正・昭和期における女性の社会進出とその影響」について研究しています。きっかけは「日本の女性管理職の割合がG7で最下位」という新聞記事を見かけたことでした。現代日本でこの状態なら、戦前の日本はどうだったのか、大衆が自由を求めた大正デモクラシーを起点として調べてみたいと思います、取り組んでいます。

——新型コロナ・ウィルス蔓延防止のため、現在、文理学部では遠隔授業と対面授業などの併用で授業が実施されていますが、古川ゼミはどのような形態での授業でしょうか。

（千葉）昨年の前期から今年一月まではZoomによる同時双方向型の授業でしたが、徐々に新型コロナが落ち着いていったこともあり、今年一月中旬から教室とZoomのハイブリッド授業に切り替わりました。

新型コロナによって図書館や史料館などの閉館が続いたり、開館時間が縮小したりしていたので、史料集めに苦戦しました。オンライン上で史料や論文を集めるにしても限界があり、先行研究の後追いにな

らないか不安になりながらの研究でした。

ただ、オンライン化が進んだことで自宅から手軽に授業に参加することができ、通学時間や交通費を気にする必要もなく、便利ではありましたが、

——続いて古川先生のゼミの雰囲気はどのような感じでしょうか。また古川先生の印象はどうですか。研究指導の姿勢や、ちょっとしたエピソードもあれば教えてください。

(千葉) ゼミ懇親会をオンラインで開催したり、初回授業内でグループに分かれて交流する時間を設けていただいたりしたので、和気藹々とした雰囲気です。

古川先生は、マメな方という印象です。Zoom授業の際、その回に発表する学生の研究テーマに合わせてZoomに映るビデオ背景を変えたり、予習レポートの添削時にも細かく丁寧にご指摘いただいております。先生もお忙しいでしょうに、いつ寝ているのだろう、といった不思議に思っています。

——日本近現代史を学ぶ上で、特に注意している点等がありますか？
或いは古川先生から注意するようにアドバイスを受けたこと等ありますか？

(千葉) 研究するテーマにもよりますが、他の時代と比べて近現代は史料を多く選択できる時代だと思うので、史料批判を疎かにしないよう注意しています。

また、出来事の年から離れている年に制作された史資料には、個人

の主観が入りやすいとうかがったので、その点も注意しています。

——卒業後の進路については、どんなところに就職したいですか。答えられる範囲で教えてください。

(千葉) 人材派遣会社に就職を決めました。歴史とは関係が薄いかもありませんが、何か活かせる時がきたら嬉しいです。

——本日はありがとうございました。

(質問者・文責 山本興一郎)

訃報

日本大学名誉教授・日本大学史学会元会長・史学科元教授松村潤先生が、令和三年九月二二日、逝去されました。また、先生は九月二二日付をもって従五位に追叙されました。哀悼の意を表し、謹んでお知らせいたします。(享年九七歳)

訃報

史学科で助手を務められ、長年史学科の講義もご担当されていた理事の楠家重敏先生が、令和四年一月二九日、逝去されました。哀悼の意を表し、謹んでお知らせいたします。(享年六九歳)

平成三一・令和二年度卒業論文題目

現在の史学科学学生はどのような興味・関心を持っているのか、平成三二年度・令和二年度卒業生の卒業論文の題目を一部ご紹介いたします。(順不同)

評・五十戸の成立

風土記の伝承・説話にみる古代社会―播磨国風土記を中心として―

職能からみる陰陽師の実態

九世紀の文人貴族 小野篁を中心として

御成敗式目の道理主義と北条泰時の政治思想について

平氏政権下における貨幣の流通―日宋貿易を中心として―

江戸時代の関所破りの実態

近世農村女性の社会的地位について

二つの日記からみた五節供と節供菓子の関係について

江戸時代の人々による疱瘡の受容

近世における手習塾の実態について―近代学校教育との連続性―

弾丸列車計画と新幹線計画に対する当時の国民の反応

太平洋戦争における開戦と終戦工作の検証

浅草六区と活動写真―明治、大正期を中心に―

大正時代の新聞界と新聞に対する掣肘の再検討―関東大震災期を中心に―

インカ帝国の地方統治における文化的影響

ペルセポリス王宮炎上―衝動的放火説―

近世スウェーデンにおけるプロテスタンティズムと臣民化

18世紀プロイセンにおける官僚制の特徴と変遷について

ヴァイマル共和国前期の国防軍の動向とその影響

20世紀アメリカの音楽界と社会問題

太平洋戦争中のアメリカの日系移民の収容政策について

ヴィクトリア朝期イギリス都市部における墓碑の文化と受容

住居から見るエジプト先王朝時代の生活

ミーナーイー陶器にみるイスラーム陶器の発展

トルコにおけるケマリズムの歴史的展開

明代順天府における徭役の銀納化と一条鞭法

前漢の匈奴社会における漢人―亡命者を中心に―

満洲に於ける移民と神社の関係

日中戦争期における日本人作家のアジア観―坂口安吾を題材として―

千葉県から出土した有孔鏝付土器について

那珂川下流域における弥生集落と農耕

文様要素から見た顔面把手(装飾)

古代山城の城壁構造の検討

近世大名家は墓所造営に將軍墓を指向したのか

富本銭から見る飛鳥池工房遺跡の特質

「葦山反射炉」保存の過去・現在・未来

浅草凌雲閣の発掘から考える文化財の保存

六義園と小石川後樂園を中心とする大名庭園の活用と保存

令和二年度史学科行事紹介

- 四月 一日 日本大学入学式 ※中止
五月 一日 前学期授業開始（八月二二日まで）
七月 一六日 文理学部夏季Webオープンキャンパス
八月 二七日 夏季休暇開始（九月二二日まで）
八月 三一日 遺跡発掘調査（九月三日まで）
南中野遺跡において、考古学実地研究の野外実習が行われ、二〇名の学生が参加しました。

- 九月 二三日 後学期ガイダンス
九月 二四日 後学期授業開始（一月二五日まで）
一〇月 一日 文理学部秋季Webオープンキャンパス
一〇月 二四日 学術研究発表会（史学部会）
Zoomを用いたオンラインにて開催しました。
一二月 二七日 冬季休暇開始（一月七日まで）
一月 二二日 卒業論文受付開始（一月一四日まで）
一月 三〇日 春季休暇開始（三月三二日まで）
三月 二五日 卒業式（日本武道館）・文理学部学位記伝達式

令和三年度史学科行事紹介

- 四月 一日 ガイダンス開始（四月七日まで）
四月 一日 文理学部開講式
四月 八日 日本大学入学式（日本武道館）
四月 九日 前学期授業開始（七月三〇日まで）
四月 一七日 関ゼミナール・日本史基礎実習の合同野外授業
世田谷区・文理学部周辺において、関ゼミ、基礎実習の史跡調査のための野外授業が行われ、多数の学生が参加しました。

- 七月 一八日 文理学部夏季Webオープンキャンパス
史学科では、Webexを利用した相談会のほかに、小川雄准教授による模擬授業「江戸の海賊たち―中近世移行期の海の世界―」を行いました。
八月 八日 夏季休暇開始（九月一二日まで）
九月 二日 遺跡発掘調査（九月九日まで）
南中野遺跡において、考古学実地研究の野外実習が行われる予定でしたが、中止となりました。

- 九月 一五日 後学期ガイダンス
九月 一八日 後学期授業開始（一月二八日まで）
九月 二六日 文理学部秋季Webオープンキャンパス
史学科では、Webexを利用した相談会のほかに、小川雄准教授による模擬授業「江戸の海賊たち―中近世移行期の海の世界―」を行いました。
一〇月 三〇日 学術研究発表会（史学部会）
Zoomを用いたオンラインにて開催しました。
一二月 五日 関ゼミナール・日本史基礎実習の合同野外授業
神奈川県・鎌倉市において、関ゼミナール・日本史基礎実習の史跡調査のための野外授業が行われ、多数の学生が参加しました。
一二月 二六日 冬季休暇開始（一月一六日まで）
一月 一日 卒業論文受付開始（一月一三日まで）
一月 三〇日 春季休暇開始（三月三二日まで）
三月 二五日 卒業式（日本武道館）・文理学部学位記伝達式

令和二年・三年度史学科データ一覧

人事異動

退任

加藤 直人 教授（令和三年三月三一日）
 山本 興一郎 助手（令和三年三月三一日）
 市川 光祐 助手（令和三年三月三一日）
 小島 りら 助手（令和三年三月三一日）
 辻 あや子 助手（令和三年三月三一日）
 着任
 武井 紀子 准教授（令和三年四月一日）
 福島 恵 准教授（令和三年四月一日）
 高島 廉 助手（令和三年四月一日）
 岡部 めぐみ 助手（令和三年四月一日）
 軽部 友香 助手（令和三年四月一日）
 吉原 紗希 助手（令和三年四月一日）

令和二年度史学科学生在籍者数

学部生 一年生 一四〇名、二年生 一四六名
 三年生 一三一名、四年生 一四三名
 合計 五六〇名
 大学院生(M) 一年生 五名、二年生 一名
 合計 一六名
 大学院生(D) 一年生 三名、二年生 一名
 合計 四名

令和三年度史学科学生在籍者数

学部生 一年生 一三九名、二年生 一五〇名
 三年生 一三八名、四年生 一二八名
 合計 五五五名

大学院生(M) 一年生 五名、二年生 一名

合計 一六名

大学院生(D) 一年生 三名、二年生 三名、
 三年生 一名

合計 七名

編集部より

同窓会会報は今後、ホームページでの閲覧を基本とします。
 URLは左記の通りです。

○近況通信を募集しております。ご寄稿を希望される会員の方は、本会報一ページ目記載の住所へご寄稿ください。なお、字数は二〇〇字以内でお願いいたします。

○住所変更等された場合は、本会報一ページ目記載の住所へご連絡ください。なお、お電話でのご依頼は、事務局体制の事情により、恐れ入りますがご遠慮いただきましたたく存じます。

〈編集後記〉

長らくお待たせいたしました。昨年度は諸般の事情で『会報』を刊行することができませんでした。そのため、第六号・第七号の合併号としてお届けいたします。新任の先生方のご紹介、そして現役学生の今現在の学びの仕方等を掲載いたします。

史学科同窓会ホームページURL
<http://www.nu-hist-d.jp>

